

#### (4) 小区画水田と極小区画水田の名称について

日本では弥生時代以降の小区画水田が、全国各地で検出されている。その中には、小区画一区画の大きさが極めて小さいことから、極小区画水田と呼称される水田もある。ここでは、“小区画水田”と“極小区画水田”という、用語の問題について若干考えてみたい。

「小区画水田」という名称は、高崎市日高遺跡が発見された頃から、使われ始めたようである。さらに、群馬県芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・同道遺跡等が発掘されるに及び、6世紀代の榛名山二ツ岳の火山噴出物で埋もれた水田跡が、その中でも極めて小さな小区画であることから、「ミニ水田」という愛称も名付けられた。つまり、「小区画水田」という呼称自体は、当初は群馬県の6世紀代の「ミニ水田」を指して、使われたようである。

その後、日本各地で弥生～古墳時代の水田跡検出が多くなり、そのほとんどが、登呂遺跡の形態や規模と大きくかけ離れたものであり、「小区画水田」として考えられるようになってきた。そして全国的に検出される水田跡を、総じて「小区画水田」と呼称するようになってきた。

このような状況の中、都出比呂志・工業善通は、「ミニ水田」の呼称の不適正を指摘した（文献1・2）。工業善通は「ミニ水田」の愛称について、「ミニ水田と呼ばれることもあるが、より大きな区画の中を、年ごとに小分割しなおしている場合もあるから、小区画ごとに独立した水田ではないので、必ずしも適当な名称ではない」と指摘された。そして、高崎市御布呂遺跡・芦田貝戸遺跡・日高遺跡Ⅰ区、群馬町同道遺跡の他、焼津市道場田・小川城遺跡、仙台市富沢遺跡等の例を挙げられ、これらを「極小区画水田」と表現された。

群馬県では、都出・工業の指摘に基づいて、小区画水田・極小区画水田を使い分けている。簡単に言えば、AD300年前後のAs-C下水田～5世紀代の洪水層下の水田を「小区画水田」、6世紀のHr-FA・Hr-FP下水田（ミニ水田）を「極小区画水田」と呼称している。しかし、小区画水田・極小区画水田の分類は、なかなか容易ではないのが現状である。現在は、「極小区画水田」は、「小区画水田」の中の一つの形態であり、大きくは「小区画水田」に含んで考えている。

また筆者は、「不定形な小区画水田→規格化された極小区画水田」という、水田の発展過程を考えている。しかし、弥生時代後期～古墳時代前期の極小区画水田が検出されているという指摘もある（文献3）。ただ、区画の大小の変化のみの理由で、収量が変化するとは考えられない（文献4）。区画の大小が重要なのではなく、流水方向の小畦畔が碁盤目状に規格化されたことで、灌漑技術が向上したという点を注目していく必要がある。つまり、小畦畔が規格化されることで、一区画の面積が極小区画へと変化していくと考えられる。高所から低所へ田越し且つ掛流し方式で、直線的に用水を流すという方法自体は、地域・時代を問わず同じであろう。その用水を、如何に効率的に分配・湛水していくかという点において、不定形な小区画水田のさらに進化した形態が、碁盤目状を呈する規格化された極小区画水田だと考えられる。

（文責 齋藤英敏）

#### （参考文献）

1. 都出比呂志 1989「日本農耕社会の成立過程」P-54、岩波書店。
2. 工業善通 1991「水田の考古学」UP考古学選書、東京大学出版会。
3. 滝沢 誠 1999「二本型農耕社会の形成—古墳時代における水田開発—」、「食糧生産社会の考古学」朝倉書店。
4. 齋藤英敏 1998「試論古代小区画水田」、「古文化談叢」第41集。
5. 齋藤英敏 2001「小区画水田・極小区画水田の構造—群馬の水田跡から見た古代東アジア—」、「研究紀要」19(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。